

常陸大宮から新種発見—日本固有の淡水貝「ヒラヌマガイ」—

自然部会 専門調査員 稲葉 修(飯舘村教育委員会教諭)
佐野 勲(東北大学 東北アジア研究センター/東京大学
大学院理学系研究科)

2025年7月、常陸大宮市内にて、市内の水辺を代表的な生息地(タイプ産地)とする淡水二枚貝の新種「ヒラヌマガイ」が、佐野 勲(東北大学 東北アジア研究センター、兼 東京大学 大学院理学系研究科)と、近藤 高貴氏(元大阪教育大学)との共同研究で報告されました。「ヒラヌマガイ」は、殻が細長く平たい形が特徴で、東北から関東地方の太平洋岸にのみ生息する、日本固有の生きものです。見つかっている生息地は、丘陵地や水田地帯のなかを流れる水路であり、三面護岸された場所にはほとんど生息していません。

ドブガイ類は殻の形のバリエーションが大きく、長らく種類の区別が難しかったのですが、近年の遺伝解析の進展により、ヒラヌマガイやキュウシュウヌマガイなど新たな多様性が明らかになってきました。生物多様性を守るには、まず正しくその多様性を知ることが大切です。

近年の研究では、殻の形だけでなく、DNAの情報を調べることで、見た目がよく似た貝でも別の種であるかどうかを判別できるようになりました。ヒラヌマガイも、こうした遺伝解析によって初めて独立した種であることが確認されました。最新の研究手法と、地域での調査が結びつくことで、身近な自然の新たな姿が明らかになっています。

採集や持ち帰り、外来生物の放流は行わず、水辺の環境を静かに見守っていただくことが、地域の生きものを守る最も確かな方法です。生息地ではハゼ科やドジョウ科、コイ科の魚がみられ、ヒラヌマガイは、これらの魚に自分の子どもを寄生させて繁殖していると思われます。ですから、貝を守るためには、魚の住める環境を大切にしたいものです。

今回の研究は、宮崎 淳一先生(元山梨大学)をはじめ、多くの皆さまのご協力に支えられました。ヒラヌマガイが「この地域ならではの自然の証」として、未来の世代へ受け継がれていくことを心より願っています。

〈お詫びと訂正〉

広報常陸大宮 令和7年12月号「常陸大宮市史編さんだより」の連載回数に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。[誤] vol.94 [正] No.95



▲ヒラヌマガイ(茨城県常陸大宮市で採集)



▲ヒラヌマガイの生息環境。このような素掘り水路には、貝をはじめ多くの生物が見られる。



▲二枚貝類の調査風景(佐野氏)

参考: Isao Sano, & Takaki Kondo. (2025). Revision of *Sinanodonta* Species (Bivalvia: Unionidae) Native to Japan with Description of Two New Species. *Venus*, 83(1-4), 43-55. https://doi.org/10.18941/venus.83.1-4_43